

査読論文

劇場ホテルにおける観光文化の形成

— インドネシアにおけるリゾートホテルの調査をとおして —

井口 由布*・近藤 まり**

要 旨

本論文は、インドネシアの5つのリゾートホテルにおける調査をもとにして、開発途上国におけるグローバルな観光産業の発展とそこにおける文化の形成を読み解くことを目的としている。本論文が考察しようとしているのは、開発途上国のリゾートにおいて「劇場ホテル」と呼ぶべき文化的装置が出現し、その装置がゲストとホストの双方の接触をとおして新しい観光文化を作り出しているのではないかということである。すなわちこの論文は、劇場ホテルの表舞台と舞台裏における文化の形成を明らかにしようというものである。本論文は、2006年2月の1週間において行われたインドネシアの5つのリゾートホテルにおける調査にもとづいている。調査では、ホテルグループの地域統括ディレクター、ジェネラルマネージャー、各ホテルの部門マネージャー、そのほかの従業員、労働組合員、従業員の家族、ホテル周辺の共同体の住民などにインタビューを行った。この調査をとおして確認したのは以下である。劇場ホテルにおいて、滞在者たちは劇場ホテルが演出する楽園の舞台を背景にプロットにしたがって楽園のドラマの主人公を演じ、それをとおして新しいアイデンティティを獲得する。他方で劇場ホテルは、舞台裏のマネージャーや従業員たちが、自ら進んで効果的に楽園創出を行う規律的で主体的な裏方となるような装置でもある。そこでは伝統的であるといわれる家族やカーストなどの概念が近代的に作り替えられて利用されている。また劇場ホテルは、従業員ではない共同体の住民をも劇場ホテルの舞台裏の資源として活用している。

キーワード

文化、アイデンティティ、観光、インドネシア、バリ、伝統

I. はじめに

本論文の目的は、開発途上国におけるグローバルな観光産業の発展とそこにおける文化の形成を読み解くことである。わたしたちは、開発途上国のリゾートにおいて「劇場ホテル」と呼

* 執筆 者：井口由布

機関/役職：立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部 准教授

連絡先：〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

E-mail：yufuig@apu.ac.jp

** 執筆 者：近藤まり

機関/役職：同志社大学 大学院ビジネス研究科 教授

連絡先：〒602-8580 京都市上京区今出川通り烏丸東入

ぶべき文化的装置が出現しているのではないかと考えている。そこでは、滞在者たちは劇場ホテルが演出する楽園の舞台を背景にプロットにしたがって楽園のドラマの主人公を演じ、それをとおして新しいアイデンティティを獲得するのである。他方で劇場ホテルは、舞台の装置を構成する他の登場人物たちや、背景となる楽園の風景、舞台装置を操作する裏方たちをも効果的に創出する。この劇場ホテルは、これまでのようにハードフェンスによってまわりの共同体からホテルの空間を分離することによって観光の劇場的空間を作り出すのではない。むしろ劇場ホテルは現地の共同体のなかに埋め込まれており、それらの共同体を劇場ホテルの舞台裏の資源として活用するだけでなく、それらを表舞台の資源へと改変していくのではないだろうか。この論文は、劇場ホテルの表舞台と舞台裏における文化の形成を明らかにしようというものである。

わたしたちは、2006年2月の1週間にインドネシアの5つのリゾートホテルを訪れた。それらのうち、わたしたちはXグループの二つのホテルに滞在した。一つはバリのウブドにあり(Xウブド・ホテルと呼ぶことにする)もう一つは古代遺跡の近くにある(これ以降X-Xホテルと呼ぶことにする)。これらの二つの新しいタイプのホテルの特徴をよりはっきりさせるために、わたしたちはバリのヌサ・ドゥアにあるYホテル、バリのウブドにあるZホテルも調査に訪れた。滞在中にわたしたちがインタビューを行った相手は多岐にわたる。Xグループの地域ディレクター、X-Xホテルのジェネラル・マネージャー、各ホテルの部門マネージャー、そのほかの従業員、労働組合員、従業員の家族、ホテル周辺の共同体の住民などである。

この論文は以下のように組み立てられている。第2章は観光産業と文化の形成についての議論をふりかえり、劇場ホテルというわたしたちの概念装置について説明する。第3章と第4章はXグループのホテルが行っている劇場ホテル的戦略とそこにおいて新しく作られる文化について、現地における聞き取り調査にもとづいて論ずる。第3章はバリ島にあるXグループのホテルとそれ以外のホテルについて論じており、第4章はバリ島の外にある劇場ホテルの実践について論じる。

II. 観光文化の形成と観光の劇場

1. インドネシアにおける観光文化の形成

本論文はインドネシアのリゾートホテルにおけるケース・スタディをとおして、文化の形成をグローバルな観光産業との関係で見るとのである。リゾートホテルの調査をとおして上記の課題を探索している先行研究は、管見のかぎりでは見当たらない¹。しかしながら、ポスト植民地主義批評、文化研究、観光人類学などのさまざまな分野において、ポスト植民地主義と文化形成さらには観光産業との関係が論じられている。まず、観光人類学における議論を山下晋司にしたがって整理し、そのあと文化形成と観光の問題をインドネシアに着目して振り返る。

山下は、観光という現象を「観光を産み出すしかけ」、「観光が観光客を受け入れる社会に与える影響」、「観光によって作り出される文化」の三つにわけて考えることができるとしている(山下 1996: 7-11)。「観光を産み出すしかけ」にかんする研究は観光の活動をミシェル・フーコーのいう「まなざし」との関連でとらえ、観光へのまなざしがどのように成立して、どのような特質をもっているのかに着目するジョン・アーリの研究(アーリ 1995)や、観光活動を、「本物らしさの追求」をすることで近代の疎外を超克しようとする営みと考えるデーモン・マッカネルの研究(MacCannell 1973, 1976)などをふくんでいる。多くの観光人類学が関心をよせてきたのは、二つ目の「観光が観光客を受け入れる社会に与える影響」にかんする研究である。観光開発によって現地の伝統文化が破壊されるというデイビッド・グリーンウッドの研究(Greenwood 1977 [1989])や、多くの伝統が最近作られたことを指摘するエリック・ホブズボウムの「伝統の創造」(1983)のような観点がここに入る。「観光によって作り出される文化」は、観光文化そのものに着目した研究である²。これまで観光文化は本来的ではない模造品であると考えられてきたが、山下は「本来的な伝統文化が消滅する」という視点それ自体を近代的な言説としてとらえようとするジェームズ・クリフォードを援用しながら、「本来的なもの」それ自体を問いなおすことが必要であると指摘している(Clifford 1980, 山下 1996)。

わたしたちの研究は山下の分類にしたがえば、「観光を産み出すしかけ」と「観光によって作り出される文化」の双方に着目している研究となろう。わたしたちはフーコーのいうまなざしが観光においてどのように成立し、それがどのような観光文化を作り出しているのかについて考察する。わたしたちが考えている観光文化は、観光のまなざしによって生成される伝統芸能などの狭い意味での文化だけでなく、その同じまなざしによって生成される、観光客と観光客を迎える側のアイデンティティをもふくんでいる。そこでは、観光をする主体や観光客を迎える主体が観光活動に先んじて存在しているのではなく、観光をするという行為や観光客を迎えるという行為を通じて、そのつど生成されると考える³。

次に、観光をととした文化の形成にかんしてどのような議論がなされてきたかを、とりわけインドネシアに着目して概観する。エイドリアン・ヴィッカーズの『バリ——創られた楽園』(1989)は、バリにおけるポスト植民地的文化の形成とグローバルな観光産業との関係を植民地時代から継続する問題として見ている。ヴィッカーズは400年にわたるバリ文化の形成を西洋によって作られたバリ・イメージとバリ人によるバリ・イメージの対抗と交渉の関係として見なしており、グローバルな観光産業と現代の国際関係を背景にして、これらの二つのイメージは重なり合いときに混ざり合っているということを指摘している⁴。

永渕康之の『バリ』(1998)はバリにおける植民地主義と文化の形成の関係を探求し、「神々の島」や「芸術の島」というバリのイメージを作りだしたのが、バリの地元コミュニティではなくオランダ植民地政府であったことを述べている。永渕は1931年のバリにおける国際植民博覧会と同年のミゲル・コヴァルビアスの『バリ島』の出版をとりあげ、ミシェル・フーコーが

いう博物学的なまなざしがバリのイメージを作りあげたことを論じている。永渕の著書は植民地時代のバリに焦点を当てたもので、本研究にとっての歴史的背景を提供するものである。

わたしたちの研究に直接的にもっとも示唆を与えたのは、山下晋司の『バリ——観光人類学のレッスン』(1999)である。山下は、バリにおける観光産業がホブズボウムとレンジャーのいう「伝統の創造」と大きくかかわっていることを指摘した。ホブズボウムによれば「伝統とは長い年月を経たものと思われ、そういわれているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時にはねつ造されたりしたものもある」(Hobsbawm 1983: 1)。山下は植民地時代における支配と独立後におけるインドネシアの国民国家形成のなかでバリがパラダイスとして形成され、さまざまな伝統が作られたことを指摘している。それらには舞踏や音楽などの「伝統的なパフォーマンス」、工芸品や絵画などの「伝統的な芸術」、観光客たちをもてなす「伝統的なふるまい」などがふくまれる。普通に考えられるのとは異なり、観光産業が発展すればするほど、バリの人々はいっそう伝統的になるということが指摘されている。もちろん、この「伝統」はホブズボウムとレンジャーのいう意味での作られた「伝統」にはかならず、植民地時代から続くまなざしによってバリの人々のアイデンティティが形成されていることを示している⁵。

山下は伝統芸能集団に焦点をあてながら、観光産業との接触のなかで伝統化していくバリのようすについて論じている。これにたいして本研究では、観光客との直接的な接触がより頻繁であるホテル産業に着目し、グローバルな産業が伝統とどのような関係を取り結び、どのような新しい文化が形成され、どのようなアイデンティティが作られているのかを明らかにしたいと考えている。

2. 劇場ホテル

グローバルな観光産業においてどのような文化が形成されるのかを考えるときに、わたしたちは劇場ホテルという概念を手がかりにすることにした。わたしたちの劇場ホテルという概念は、クリフォード・ギアツの劇場国家、観光を劇場空間としてみなすマッカネル、山下の観光客の劇場としての現代のバリ島、さらにはバトラーのいうパフォーマンスイビティ(行為遂行性)などから示唆を受けたものである。

現代のバリ島が観光客の劇場となっているという山下の指摘は、もともとはギアツとマッカネルから着想をえたものであろう。ギアツは、19世紀のバリの国家が「王と君主が興行主、僧侶が監督、農民が脇役と舞台装置係と観客であるような劇場国家」であったと述べている(Geerts 1980: 13; [ギアツ 1990: 12])。バリで行われた儀礼は特定の政治目的の手段ではなく、その儀礼を執り行うこと自体が目的であったという。マッカネルの議論は現代の観光にかんするもので、観光が劇場空間を形成していることを指摘している(MacCannell 1976)。観光はオーセンティシティを追求するものである。観光においてオーセンティシティの演劇が上

演され、この上演をとおして観光客のための文化が新しく作られることになる。

山下はギアツの劇場国家とマッカネルの劇場空間としての観光にもとづいて、バリを劇場国家の20世紀版とみなしている(山下 1999: 38)。バリの魅力はマリンスポーツやサーフィンを楽しめるビーチだけでなく、人々の日々の生活や宗教的な実践などにもある。バリでは、ホテル、地方政府、グローバルな旅行会社と現地の旅行会社が興行主や監督となって、楽園の劇を上演しているのである。バリ人たちは脇役を演じ、舞台装置係をしながら、創られた伝統によって装飾された演劇に貢献している。

わたしたちが手がかりにする劇場ホテルという概念は、山下がいう観光の劇場が一つのホテルに収斂された形態である。この劇場の興行主と演出家はグローバルな観光産業であり、従業員と周辺の村落共同体の住民たちは劇の脇役と舞台装置係をつとめ、滞在客は劇の主人公を演じる。とりわけわたしたちはこの劇場において、観光文化としての伝統文化だけではなく、新しいアイデンティティが形成される可能性を示したい。そこで着目するのは演じるという行為である。ジュディス・バトラーはジェンダー・アイデンティティにかんして本質主義をしりぞけたうえで、ジェンダーを演じ続けることによってジェンダーという事実を再生産する(ジェンダー・アイデンティティをみずからのものとして作りあげる)パフォーマンス性(行為遂行性)のメカニズムについて指摘している(Butler 1994 [バトラー 1999])。バトラーのことを劇場ホテルにあてはめると、劇場ホテルの舞台において主人公として演技をするなかで主人公のアイデンティティを作りあげていく過程があると考えられるのではないだろうか。また、このアイデンティティ創出の過程は主人公だけでなく、脇役や舞台装置係であるマネージャーや従業員、周辺の村落の人々にも起きているのではないか。劇場ホテルは、かれらが自ら進んで効果的に楽園を創出する規律的で主体的な裏方となるような装置でもある⁶。そこでは家族やカーストなどの概念が近代的に作りかえられ、伝統的な価値観にそってみずからを律することがそのままグローバル産業における効果的な人材となるようなプロセスがあるのではないか。以下では、劇場ホテルにおける新しい文化とアイデンティティの形成をホテルにおける聞き取り調査にもとづいて検証する。

Ⅲ. バリの劇場ホテル

バリ島はインドネシアの首都ジャカルタのあるジャワ島のすぐ東に位置する面積5632平方キロの島で、人口は約389万人である。主な産業は水田での稲作を中心とした農業と観光業である。世界最大のムスリム国であるインドネシアにあって、バリではバリ・ヒンズーを信仰する人々が多い。

わたしたちが調査を行ったXウブド・ホテルは、バリ島の内陸部に位置するウブドという地区にある。バリのウブド地区は新しい形態のホテルを提供する地域の一つと考えられ

る。ウブドは伝統的工芸品や伝統芸能で有名な地域で、田舎の風景、溪谷のようす、伝統的な村落の形式など、バリの特色をもっとも残した場所だと呼ばれている。バリではこれまで海岸部が有名で、観光客用のホテルも海岸地域に集中していた。内陸部はバリ観光の主要な目的地ではなかったのである。しかしながら、より本物らしいバリが追求され、「集落に根ざした観光 *village based tourism development*」(大谷・中岡 2003: 649)が提唱されるなかで、内陸部への関心がしだいに形成されてきた。

この節では、第一に内陸部にある X ウブド・ホテルにおける聞き取り調査を中心に、劇場ホテルの表舞台と舞台裏についてどのような文化が形成されているのかを検討する。第二に X ウブド・ホテルのありようをよりはっきりさせるために、同じウブドにある Z ホテルと海岸部の観光ゲッターにある Y ホテルにおける状況について検討する。

インドネシアとバリ島



出典：山下晋司『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会，1999年，2 ページ

1. 表舞台：植民地支配者の視線

劇場ホテルの表舞台において、観光客はどのような接触をへてどのようなアイデンティティを形成するのだろうか。X-X ホテルのジェネラル・マネージャーは2006年2月13日のインタビュー時において、X グループは「単なる滞在施設ではなく、ライフスタイル・カンパニーで

ある」ということを繰り返し強調した。つまり、Xグループは滞在のための施設を売っているのではなく、ライフスタイルを売っているのである。ライフスタイルは食事、衣服、住居だけでなく、思想や哲学をもふくんでいる。ゲストたちはXグループの提供するライフスタイルのプロットにしたがってさまざまな文化装置に参加することで、新しいアイデンティティを獲得することになるというわけだ。それではXウブドにおけるライフスタイルのプロットとはどのようなものなのだろうか。

(1) 立地

Xウブド・ホテルは、ウブドのはじ、B川の溪谷をみおろすK村に位置している。バリの観光ホテルを建築学的な視点で分析している中尾によれば、このホテルはバリの村にかんする詳細な民俗学的知識を使って現地的な構造を複製したものである。「各客室は門のある塀で囲まれ客室へアプローチするための軸となる道が造られ、その両側に客室が整然と並ぶ。この構成は、バリ・アガの集落構成と同じである」⁷ (中尾 2005: 240)。

Xグループのそれぞれのホテルは、現地の自然や文化を利用してリゾートを展開することを進めている。その目的はまわりの自然環境や文化的な実践と調和することであり、建築などのハード面だけでなく、旅行客の行うアクティビティなどのソフト面においても調和が追求されている。ある旅行書は、以下のように述べている。

(Xグループが) 世界のトラベラーたちから憧れといわれる理由。それは、単に、豪華な造りのスタイリッシュな部屋に泊まれるから、ではない。周囲の自然や文化に美しくとけ込むようなランドスケープや建築のアイデア。クオリティの高いスタッフたちの心づくしのホスピタリティや、極上の笑顔。そして、その土地を最も印象的に体験するべく考え尽くされたアクティビティ。ハードはもちろん、ソフトな部分もゲストをもてなすために細部まで考え抜かれているのがXの本領だ。(アジアン・リゾート 2006: 101)

旅行書が述べるとおり私たちが訪れた2006年の2月においても、Xウブド・ホテルはその土地との美しい調和を示しているようであった。リゾートの目の前には棚田が広がり、田で働く農民たちが見えた。棚田とリゾートのあいだには遮るものはなく、リゾートは田園のなかにあるようだ。

さらに驚くことにリゾート内で私たちは何度も村人たちに遭遇した。あるときは、牛に食べさせるための草がいっぱい入った大きな籠を頭にのせた村人がリゾート内の小道を歩いていた。また別のときには、小道の脇にある小さな水路で村人が鉈を洗っていた。これらの人々はホテルの従業員ではなくホテルのあるK村の住民である。ホテルによれば、住民たちは村からリゾートを横切って棚田に出ることを許されているという。リゾート内の小道にめぐらされた石

塀には、村へ通じる扉がいくつも配されている。つまり、村とホテルの関係はホテルを建設する初期の段階からあらかじめ計画されていたということである。K村とのあいだにはたしかに塀があるが、いくつも扉がしつらえてあり村人は自由に行き来することができる。ホテルと村との境界はあいまいで、これによって滞在客はまるでバリの村落に滞在しているかのような気分を体験できるのである。つまり、Xウブド・ホテルはたんにまわりの自然や村落と調和しているだけではなく、その境界を溶解させようとする演出を行っているのである。

このような演出は、これまでのホテル施設には見られなかったのではないだろうか。たとえば山下は演出された楽園の装置として二つの種類の宿を論じている(山下1999:118-120)。一つは、そのなかでバリのすべてが体験できるハード・フェンスで仕切られたホテルである。もう一つは、「バリニーズの家に住む感覚で」滞在できるコテージやバンガロー、あるいはウブドなどで行われるホームステイという名の民宿である。だが、Xウブド・ホテルはこの二つの宿のどちらにもあてはまらない。Xウブドが演出する楽園の装置は、ハード・フェンスで仕切られたホテルよりいっそうオーセンティシティを演出しているといえよう。ほんとうの村人たちがリゾートを横切って棚田へ出かけ、農作業をする。滞在客はその姿を長椅子にすわってジュースを飲みながらながめて、バリらしさを感じるのである。滞在客が体験できるバリのな生活は、バリの村人たちの家に滞在して棚田で農作業をする農民になることとも異なっているし、観光客としてバリの農民を外から見物するのも異なっている。Xウブドが提供している体験は、農村の中から農民の生活を眺めることなのである。

滞在客は、Xウブドにおいてバリの宗教的な雰囲気を経験することもできる。この体験は、バリの村へ出かけていって宗教儀式を見物するのは少々異なったものであると考えられる。ホテルにはロビーとレストランをつなぐ屋根付きの廊下があるが、一カ所だけ1メートルほど屋根のついていない場所がある。そこは村人が村から川へと霊をみちびくときに、ちょうど霊が通りぬける場所なのである。屋根がついていることは神聖ではないと考えられているために1メートルほどがとぎれているのだという。スコールがくれば滞在客は濡れてしまうかもしれない。だがこの建築は、バリにおいては人々の宗教的な実践こそが優先されるのだということを演出しているのである。滞在客はこれを聞いてバリらしさを強く感じるようになる。このときの滞在客の宗教的な雰囲気を経験は、みずからがその宗教を信仰して儀式を实践することと、観光客として宗教的な儀式を外側から眺めていることのあいだに位置するように見える。みずからそのような宗教的な儀式をするわけではないが、そのような宗教的な施設に身を置いて、その宗教実践の一部にもなっている感覚である。ここでも現地民と観光客との境界線が溶解していくような体験が用意されているといっていよう。

(2) サービス

Xウブド・ホテルでは、その立地や建築だけでなく従業員たちも楽園を効果的に演出してい

る。すなわち、滞在客は田園風景や宗教的な意味をもったバリ風の建築の装置の中で、有能な演技者である従業員たちと接触することをとおして、この舞台の主演を演じることができるようになるのだ。

Xグループではどのホテルにおいても部屋数が限られており、その限られた部屋を多くのスタッフが世話している。X-Xホテルのジェネラル・マネージャーS・F氏の話によると、「Xグループでは1人のゲストにたいして平均して5人のスタッフがサービスにあたっているために、とてもパーソナルなサービスを実現することができる」という。Xウブド・ホテルではバリの伝統的な村落の雰囲気や建物を立地や建物によっても再現しようとしているが、それを人間関係においても行おうとしているようである。つまり、隣の人が誰であっても知らないふりができる都会的な環境ではなく、人に会ったら微笑んで挨拶をするような理想の共同体をつくらうとしているのである。事実、滞在客が限られていることから、Xウブドではスタッフたちはほとんどの滞在客の名前を覚えているようであった。リゾート内で従業員たちと接触を繰り返していくうちに、滞在客もじょじょにこのリゾートの登場人物というみずからの役を演じることができるようになるのである。

以上のように劇場ホテルXウブドの表舞台は、バリのオーセンティックな村落を背景にして、有能な演技者であるホテルの従業員によって構成されている。この舞台は、滞在客にみずからすすんで主演としての演技をさせるように作られている。この楽園の演出装置はバリの文化を外から見ると観光客とバリの文化を生きる現地民のあいだに、滞在客を位置づけようとしているようだ。滞在客が得るのは、村落のなかにあつて農民たちの姿をながめる視線である。それは主人のまなざし、植民地時代の白人農園主のまなざしと重ね合わされるものである。喪失の危機にある東洋的なものを保護する役目を負った植民者の視線であるともいえる⁸。

2. 舞台裏

前節でも述べたように、Xグループのホテルが提供するものは、先進工業国の経済的に恵まれた客がある種の文化的なライフスタイルのプロットを演じ、新しいアイデンティティを獲得するための文化装置であるといえる。わたしたちが劇場ホテルと呼ぶこの装置において、たんなる観客だった観光客がじょじょに劇の主演を演じ、ポスト植民地主義的なアイデンティティを獲得することになるのである。それではこの劇場の舞台でほかの登場人物を演じ、劇を演出し装置を操作する裏方たちにはなにがおこっているのだろうか。わたしたちは、興行主であるグローバル観光産業のヘッドクォーターから命じられて裏方たちが機械のように脇役を演じ舞台装置を操作しているだけでなく、この演劇に出演し劇を運営することによって、裏方たちのあいだにも新しい文化が想像されているのではないかとみている。ホテルという装置において表舞台の主演であるホテルの滞在客だけでなく、舞台裏のマネージャー、従業員、周辺の共同体の住民にも新しい文化が作り出されているのではないかと。

この節では、Xウブド・ホテルという劇場ホテルの舞台裏においてどのような接触領域が形成され、どのような文化が形成されているのかをみていく。Xウブド・ホテルはハード・フェンスで仕切られた高級メガリゾートとは異なり、村落のなかに埋め込まれたようにデザインされ、村落との関係も重要である。そこでこの節では舞台裏を二つの角度から論じたい。一つはホテル内の従業員同士の関係から、もう一つはホテルと周辺のコミュニティとの関係からである。

(1) 従業員関係：家族と伝統

グローバルなホテルにおいて従業員のあいだにヒエラルキーのシステムがあることは明らかである。インドネシアにあるXグループのホテルでは、ジェネラル・マネージャーはインドネシア出身ではない。たとえばXグループのインドネシア地域のマネージャーはハワイ出身である(M・B氏)。彼はデンヴァーのホテル・スクールを卒業したあと、550室のメガリゾートで経験を積んだ。現在彼はインドネシア地域にある5つのホテルを管理し、同時にヌサ・ドゥアにあるXグループのホテルのジェネラル・マネージャーも兼務している。また、Xウブドのジェネラル・マネージャーはスイス出身で、コーネル大学のホテル・スクールを卒業したようだ。

これにたいしてXウブドの各部署のマネージャーはインドネシア出身者で占められていた。多くはバリのホテル専門学校バリ観光アカデミー(Akademi Pariwisata Bali)卒業生である。わたしたちがインタビューをした人事マネージャー(W氏)、フロント・オフィス・マネージャー(D・T氏)、バトラー(S・H氏)はみなホテル専門学校出身で、英語に堪能だった。バトラーのS・H氏は、かつてスリランカでのホテルのオープニングにおいて人材育成の担当をしていたこともあったという。現地の高等教育を受けた人材は管理部門を担当し、インドネシア以外の地域においても活躍することがある。これに対してガーデナーやハウス・キーピングのスタッフたちは現地のエリートではなく、周辺の村落から雇われている。

このようなヒエラルキーの集団をホテルはどのように管理し、表舞台の楽園を演出しているのだろうか。Xウブド・ホテルの人事マネージャーであるW氏によれば、ホテルでは「異なる国、異なる文化、異なる階級出身の従業員たちのあいだに友情関係をはぐくむために、会食やピクニックなどをたびたび行っている」そうだ。これらのフレンドシップ・プログラムには従業員の家族たちも参加することができる。W氏はわたしたちに、会食、ピクニック、祭りのときに撮られた多くの写真がおさめられた数冊にわたるアルバムを見せてくれた。写真の中には、Xウブドのジェネラル・マネージャーであるスイス人の女性が娘とともに戸外での会食に参加しているものもあった。インドネシア地域を統括するマネージャーであるM・B氏によると、「バリにおいてホテル・ビジネスを行うにあたって、従業員とその家族をふくんだフレンドシップ・プログラムを開催することは大変に重要なことである」という。

W氏やM・B氏のインタビューから、Xグループのインドネシアにおけるホテルの運営で

は「家族」という概念が、ゲストをもてなすときだけでなく従業員の管理においても重要だということがわかる。すなわちホテルは従業員たちが働く場として人間味のない冷酷な組織ではなく、あたたかい家族のような組織を作りだそうとしている。親が子供を保護するように、ホテルが従業員を保護しマネージャーが部下を保護する。また、子供が親を尊敬し親のために尽くそうとするように、従業員がホテルのために、部下がマネージャーのために尽力しようとする。日々あるべき子供の役や親の役を演じることで、ホテルの裏方たちはそのような家族の規範をみずからのもとしているのではないだろうか。

ホテル側はカーストのような「伝統的な」制度にも関心をもっている。例えば、フロント・オフィス・マネージャーのD・T氏は「高カーストの男性が夫であることは、ホテルで仕事をしていくのにとてもよい」と述べていた。人々は彼女のことを *Ibu* (既婚の女性につける敬称) ではなく、高いカーストの男性の妻につける敬称である *Ibu Jero* で呼ぶそうだと。そのことでホテルで働く人々は彼女が高カーストに属するということがわかり、彼女を尊敬するようになるという。「伝統的価値観」にしたがって高カーストの人を尊敬することが、マネージャーを尊敬して一生懸命仕事をする態度を産み出し、また尊敬されるべき高いカーストに属する者としてふるまうこと、そのようにみずからを規律化していくことが、有能なマネージャーとして仕事をするのとつながるのだろう。

永淵によれば、バリにおけるカースト制度は古くからの伝統というよりは植民地時代に再構成されたものであるという。オランダの植民地支配以前、バリのカースト制度は地域によってまちまちでたいへん複雑であった。オランダ植民地政府はその支配に都合の良いようにカースト制度を統合して単純化した。フロント・オフィス・マネージャーの例からわかるのは、植民地制度によって再構成されたカースト制度が、グローバリゼーション時代の近代的な組織の中でまた新たに意味を与えられて改変されていることである。

Xウブド・ホテルでは、マネージャーと従業員とその家族までもが大きな一つの家族であるかのような組織を作りだし、それによって観光客のための劇場を運営しようとしている。大きな家族装置のなかで従業員たちはあるべき家族の一員としてみずからを規律化し、細かなマニュアルによって管理されなくてもみずからが主体的にホテルの哲学を実行できるようになるのだ。

では、従業員にたいする文化装置としての劇場ホテルにほころびはないのか？わたしたちは、この点をたしかめようと労働組合の代表者の話を聞いた。

バリでは労働組合活動が活発である⁹。私たちがバリを訪れたころ、ほかのいくつかのホテルではストライキがおきていた。わたしたちは2月15日にホテルの労働組合の代表であるG・S氏にインタビューすることができた。G・S氏は、K村の有力な家族の出であり、物品購入部門で働いていた。G・S氏は「Xウブド・ホテルではストライキの予定はまったくなく、労働組合はホテルとよい関係を結んでいる」と強調した。かれの弁によれば、Xウブド・ホテル

は臨時の雇用をほとんどおこなわず、そのことでホテルはストライキの脅威からのがれているとのことだった¹⁰。

フロント・オフィス・マネージャーのD・T氏もいうように、その当時ホテルは190名を雇用しており、すべてが期限なしの契約を結んでいた。期限なしの雇用が多いことは、Xグループの特徴の一つであろう。彼女は「労働組合こそが労働者を代表しているから、ホテルは労働組合の存在を正式に認めており、そのことでホテル自身はだれと交渉をすればよいかかわかる」と述べていた。G・S氏やD・T氏のインタビューからは、ホテルがかかげる家族という理念とホテルが採用している雇用形態や状況はおおむね矛盾していないようである¹¹。

最初にも述べたように、劇場ホテルがグローバルな労働分業のなかにあるとしても驚くにはあたらない。Xウブド・ホテルにおいても雇用と昇進は学歴や職歴と大きく関係している。他方で、ホテルはカーストや家族などの伝統的な制度とイデオロギーに関心をよせ、これらを利用してバリにおいて効果的な運営を行おうとしている。すなわち、グローバルな労働分業をイデオロギー的に下支えして正当化するために、伝統的な価値観が新しく作りなおされているのである。わたしたちが強調したいのは、劇場ホテルの舞台裏という接触領域において、現地の伝統的な制度が見いだされ作りなおされていることであり、その伝統的な制度は伝統的であるという形容詞がついているにもかかわらず、きわめて近代的な制度であるということである。さらに、伝統や家族という概念をとおして従業員たちは近代的な仕事を達成できる規範的な従業員として規律化されているように見え、ホテルはこのような実践を日々行う舞台装置の役割をも果たしているということである¹²。

(2) 周辺村落との関係：パトロンとしてのホテル

劇場ホテルはホテル内だけでなく、周辺の村落をもホテルの装置に組み込んでいるといえる。ここではホテルと周辺村落との関係をみていくことにしよう。先にも述べたように、Xウブド・ホテルは周辺の村落のなかに埋もれたように作られている。村の風景や村人たちの生活のありさまなどは、観光資源でありかつ劇場ホテルの舞台装置である。Xウブドによって提供されているこのような観光のありかたは、1980年代末から提案された「持続可能な観光」や「村落観光」の流れの中にあるといえるかもしれない(玉置1996)。当時、観光客たちは団体旅行やフェンスで囲まれた観光ゲッター内での旅行に飽き始めていた。かれらはよりオーセンティックで文化的な経験を求めていたのである。インドネシアではジョグジャカルタのガジャマダ大学工学部のチームが新しい時代のバリ観光のマスタープランの検討を行い、1989年に「総合観光村 (*Desa Wisata Terpadu*)」という計画を発表した(山下1999:160-162)。総合観光村は社会・文化的な面から見て本来のバリ村落の雰囲気をもった村落であり、観光のさまざまな要素を提供できる施設であるという。Xウブド・ホテルはある種の村落観光の先駆者ともいえるかもしれない。現地民と観光客を徹底的に分離してなりたつメガリゾートとは異なり、

このホテルでは両者のあいだのさまざまな接触領域を提供している。

リゾートの滞在客と周辺地域の住民の間には経済的・文化的に大きな格差があるのは事実である。このことはさまざまな意味においてホテルにリスクをもたらすはずである。他方で、周辺共同体はホテルに労働力を提供する供給源でもある。とりわけ労働集約的な劇場型ホテルでは、労働力供給という面で周辺の共同体は必要不可欠である。それではホテルと共同体はどのようにして二つの面にかんして交渉を行い、楽園演出のための装置を産み出すのだろうか。また、そのような交渉のなかでどのような文化が生まれてくるのだろうか。

2006年2月14日、わたしたちはK村のコミュニティ・オフィサーであるA氏にK村を案内してもらうことになった。A氏は30代ぐらいの男性、白いシャツにチェック柄のサロン姿であった。A氏からの聞き取りはインドネシア語で行った。K村を案内してもらうなかで、わたしたちはホテルが村のすべてのメンバー（村の子供たち、若者たち、老人たち）を劇場ホテルの装置に組み込んでいるありさまを目にした。

ホテルと周辺共同体のあいだの何よりも大きなつながりは雇用である。ホテルは多くのスタッフをK村から雇っていた。わたしたちはK村で夫がホテルで働いていると語る女性に会った。彼女と義母はわたしたちにいくつものバリのフラワー・アレンジメントを見せてくれた。それらの花々はホテルの客室やレストランを飾るためのもので、二人はそのアレンジメントの作成をホテルから請け負っているのだそうだ。村から人を雇うことは雇用の供給以外にもべつの意味ももっているようにみえる。例えば、私たちが話を聞いたガーデナー二人はK村の出身で8年間働いていると語った。村人たちをガーデナーとして雇用することは、ホテルの安全維持に役立つ。ガーデナーは庭園の管理をするだけでなく、村人以外の見知らぬ人がホテル内に入ってこないかどうかにも注意しているのである。村がホテルにとってやわらかいフェンスとなっているのである。

しかしながら、Xウブド・ホテルにおいて興味深いのは、直接的な雇用以外のつながり、つまりホテルがパトロンとなっていることである。A氏は「Xウブド・ホテルができる前には、この村には水洗トイレはなく、ホテルがK村のさまざまなインフラを整備するのを金銭的に援助した」と語った。このことで高級ホテルに隣接する土地から悪臭が漂うのがさげられただけでなく、ホテルが村のパトロンとしてふるまうことを可能にしたようだ。

A氏は、「ホテルはK村やそのほかの村の寺院に寄付を行っている」とも語った。寄付をすることでホテルは現地の宗教的な共同体においても影響力を強めることができ、宗教的なパトロンとしてふるまうこともできる。もちろん、この寄付により周辺の寺院は観光客が見学するのにたえるだけの施設になるということも忘れてはならない。

宗教儀式への寄付やインフラ整備だけでなく、ホテルは村の子供たちが伝統的な踊りを習う場所をホテル内で提供していた。村の子供たちがバリの伝統的な踊りを練習している姿は、ホテルの観光資源ともなっているのである。すなわち子供たちまでもが楽園を演出する劇場ホテ

ルの装置に組み込まれているのである。

A氏によれば、リゾートの前に広がる棚田はリゾートの所有物だが、耕作しているのはK村の村人である。この棚田にかんしてはホテルに地代を払う必要もなく、収穫物はすべて耕作者の好きにできる。そこで耕作者は生産性をあげるために精一杯、棚田の世話をしているということだった。伝統舞踊をおどる子供と同様に、棚田とそこで働く村人が重要な観光資源となっていることがわかる。

ホテルは村に対してさまざまな意味で強力なパトロンとしてふるまい、伝統的な村落風景という希有な観光資源を作り出している。Xウブド・ホテルがこれに成功しているのは、たんに資金をつぎこんでハード面を充実させているからだけではない。伝統的な農村風景という観光資源を作り出すためには、脇役たちの高度な演技力が必要とされる。劇場ホテルは村人たちの宗教的なパトロンとなって、さまざまな宗教的儀式を奨励することにより、村人たちをこれまで以上により宗教的にしたのである。また、ホテルは子供たちに伝統的な舞踊を奨励し、それにより子供たちは伝統的な文化を小さな頃から体で経験するようになった。おそらくホテルが伝統的な生産方法をとることを推奨しその方法のためにほかのさまざまなことがらが整えられていくと、村人たちは機械を導入しようというような考えをみずからすすんで断念するようになってくるのではないだろうか。これらのことはホテルが村人に無理矢理やらせているのではなく、劇場ホテルの観光客の視線のもとで行われていくなかで、まるでみずからの意思で行っているかのように自然なものになっていくのではないか¹³。

以上のように、Xウブド・ホテルは周辺の共同体とのあいだに垣根をもうけて隔離をしようとするのではなく、ホテルの装置のなかに周辺の共同体を組み込もうとしているようである。ホテルに直接雇用をされていない人々までもがホテルのシステムのなかに位置づけられているのである。ホテルは周辺共同体の新しいパトロンとなることで、周辺共同体をホテルのシステムに組み込んでいる。もちろん、地代をとりたてるかわりに小作民を保護する前近代の地主と異なり、ホテルはバリエーション豊かな風景を作り出すためのあらゆる活動にたいして助力するパトロンである。パトロンのもとで人々はますます伝統的な価値観を守り家族を大切にす規範的な人間たちとなり、みずからすすんで伝統的な儀式をとりおこない伝統的な生産活動を行う人々となっていくのである。むしろ、これらの伝統は近代的に再構成された伝統である。劇場ホテル装置は裏方たちの間にもそのような規範を内面化させ、演じているのではなくみずからの意思で仕事を行い生活をするような人々を作りだしているのである。

3. YホテルとZホテル

Xウブド・ホテルの提供する新しい楽園演出装置のありようをよりはっきりさせるために、わたしたちは海岸地域のヌサ・ドゥアにあるYホテルとウブドにあるZホテルにおいても聞き取り調査を行った。Yホテルは山下も述べたような、海岸地域にあるフェンスで囲まれた観

光ゲッターを形成しているホテルである。他方、ZホテルはXウブド・ホテルと同じウブド地域にある、Xグループの戦略を強く意識したホテルである。

Yホテルは五つ星のメガリゾートとして知られている。客室総数600、5つのレストラン、2つのバー、5つの屋外プール、ショッピングアーケード、25の会議室、1500人を収容することのできる巨大なボールルームを備えている。宿泊費は「グランド・ツイン」の部屋で一泊220米ドル、もっとも値段の高い部屋で一泊440米ドルであった(2006年2月)。

Yホテルが位置するのはヌサ・ドゥアにある塙で囲まれたリゾート地域の内部である。わたしたちが訪れた2006年には、セキュリティ・ガードがこの地域に入るすべての車両を停車させて厳しい検査を行っていた¹⁴。このリゾート地域は町の中心部からは完全に隔離されている。その意味でも、Yホテルはハードフェンスに囲まれた典型的なメガリゾート・ホテルといえよう。Yホテルの滞在客はこのハードフェンスの内部においてバリ風の休日を楽しむことができる。ホテルではオーセンティックなバリがすべての場面において演出されている。建物は堅牢な鉄筋コンクリート製であるが、チーク材の家具が置かれバリ風の絵画や彫刻がホテル中を飾っている。従業員たちはバリ風の衣装を身につけており、滞在客はバリ風の食事を楽しむこともできる。

とはいえ、Yホテルが提供する劇場的な効果はXホテルに比べれば限られているといえる。つまりYホテルでは、バリのほんものの村のなかに身をおいているような感覚を味わうための演出はなされていない。Yホテルは完全に周辺の共同体から隔離されたテーマパークである。その意味では、Yホテルが演出する楽園はグローバル・スタンダード化されており、それはハワイであってもプーケットであっても、基本的には移植可能なもののようにみえる。また600室の大型ホテルであるために従業員たちの数も膨大である。従業員が滞在客の名前を覚えているようなパーソナルなサービスは不可能だ。Xウブド・ホテルにおいて、滞在客は村のなかにいるような雰囲気を楽しむことができるのだとすれば、Yホテルでは、隣人でも顔を会わすことのない都会と同じ環境を楽しむことになる。

Zホテルの方はYホテルとは異なり、小さなリゾートである。Zホテルの客室数は20室で、プライベートプールをもつヴィラタイプの部屋もある。Zホテルには二つのレストランがあり、プールとフィットネスセンターがある。また、バリの工芸品や絵画を展示し販売する小さなギャラリーも併設されている。ZホテルはXウブド・ホテルと同じウブドに位置しており、棚田とO川に近い場所にある。わたしたちが宿泊した当時は、一泊の部屋の値段は220米ドルから275米ドルであった。Zホテルは、リゾートの立地、建築デザイン、レストランで供する食事、従業員の衣装などの観点において、Xウブド・ホテルに大きく影響を受けているようにみえる。

しかしながらZホテルでは、Xウブドにおいてえられたような大きな劇場的効果には欠けている。たしかにZホテルの立地はXウブドと似ている。Zホテルはウブドの通りの延長線

にある。その意味ではほんもののバリ人の生活に隣接している。それではなぜZホテルではXウブド・ホテルのような劇場的な効果をえることができないのだろうか。おそらく観光客たちが望んでいるのが「ほんもの」ではなく、「ほんものらしいもの」だからではないだろうか。Zホテルに隣接するほんもののバリ人たちはサロン姿ではなくTシャツにGパンである。通りには工芸品を売る店もあるが、電気屋も携帯電話ショップもある。それはあたりまえのインドネシアの現代の町である。これにたいしてXウブドにおいてはホテルのスタッフも周辺の村落の人々までもホテル劇場の登場人物を見事に演じており、滞在客はいつも舞台の上にいることができた。そこでは演じているはずのスタッフや周辺の人々までもが、装置の効果によってその役をみずからのものにしてしまっているようだった。その意味でXウブドはYホテルのように隔離された空間の中だけを楽園として作りかえているのではなく、楽園とそれをサポートする諸装置として周辺共同体をも改変しているのだといえよう。しかもそれはハード面だけではなく、人々のアイデンティティにまでも及んでいるのだ。

IV. バリの外の劇場ホテル

1. 表舞台

私たちは劇場ホテルのありようをより調査するために、バリ以外のホテルであるX-Xホテルも訪問した。X-Xホテルはインドネシアの古代遺跡の近くに1990年代の終わりごろにオープンした。この遺跡は伝統文化の中心地として知られる古都から車で1時間のところ、ホテルから3キロメートルのところに位置している。ホテルはジャングルの中にあり、Mという丘がその背後にそびえている。ホテルの建物は古代遺跡を模しており、チーク材やライムストーンと呼ばれる地元で入手可能な材料を使って作られている。ホテルのレセプション、図書館、ギャラリー、ブティックなどは中央の巨大な円形の建物の半分を占めている。もう片方の半分はオープンエアーのレストランになっており、はるか向こうに古代遺跡がみえるようにデザインされている。

ホテルを訪れる滞在客は、この円形の建物のほぼ中央部の石壁にはさまれた狭い階段を上がるように促される。レセプションのある階段の最上段に達すると、滞在客の目の前には突然その古代遺跡のある風景が出現する。これはたいへんドラマチックな作りになっており、これによって滞在客はX-Xホテルの提供するドラマの中ですっと入り込むことができるのである。

X-Xのヴィラの数36室で、先にも述べたように古代遺跡を模したドーム状の屋根をそなえている。それぞれのヴィラはライムストーンで囲まれたプライベートな庭園をもっており、屋根つきのデイベッドがしつらえてある。古代遺跡の手前に広がるのは広大な棚田で、ウブドと同様に農民が稲の世話をしたり、鳥を追いかけたりする様子を見ることができる。

2. 舞台裏

(1) 従業員関係

2月13日にわたしたちは、X-Xホテルのジェネラル・マネージャーであるS・F氏とのインタビューを行った。シェフも兼務しているS・F氏はシドニー出身で、1999年からXウブドで働いて以来、Xグループの一員である。先にも述べたように、S・F氏は、Xグループがライフスタイル・カンパニーであること、部屋を売るのではなく滞在客を家族のようにもてなすパーソナルなサービスを提供していること強調した。

パーソナルなサービスを提供するための特別な訓練をどのようにしているのか、という質問にたいして、S・F氏は「X-Xホテルには接待技術のマニュアルはない」と答えた。さらに「この地方の人は一般的にあたたかく相手を尊敬するので、ホスピタリティの仕事にはとても適している」と語った。というのも、「インドネシアのこの地方の人はすでにホスピタリティをもっているので、元々もっているその要素を発展させればよい」からである。しかしながら、グローバルな観光産業として、このリゾートはこの地方の伝統のみに頼っているわけではない。

このホテルではほかの組織と同様の近代的な人材育成を従業員たちにほどこしている。F・S氏が語るところによれば、ハウス・キーピングの部署とオペレーターの部署ではオンザジョブ・トレーニングが行われ、ホテルは哲学を共有するための部局をこえたインナーコミュニケーションを意識的に奨励している。また、このホテルでは外国語のトレーニングも行っており、常勤の英語教師を雇っている。

ホテルは管理職レベルの育成も重要視している。ジェネラル・マネージャーによれば、クロス・トレーニングのためにホテルではしばしばスタッフを他のリゾートに派遣している。それによって、スタッフたちはほかのホテルや部局の仕事について理解を深めることができる。このほかにホテルでは、会計業務、税金、雇用のしくみなどを学ぶために、スタッフたちを外部のセミナーに出張させたり、外部からトレーナーを招いたりすることもある。また、他の業種から講師を招いて講義を行ってもらうこともあるという。最近招いたのはタバコ製造業者で、組織をどのように維持するかについての講義を行ってもらったとのことであった。

以上のようにX-Xホテルでは、近代的な組織が行うさまざまな人材育成の方法——OJT、インナーコミュニケーションの活性化、クロス・トレーニング、外部講師や外部セミナーの活用法——を利用しながらも、「インドネシアのこの地方に典型的」と呼ばれるようなふるまいかたやサービスのしかたを実現しようとしている。

X-XホテルもXウブド・ホテルと同様に、従業員のなかには大きなヒエラルキーがあり、国籍、学歴、職歴による労働分業が行われている。ジェネラル・マネージャーは海外出身、各部門のマネージャーは地元の高学歴者、ドライバー、ガーデナー、クリーナーらは周辺共同体の出身者である。このような背景の異なる人々をどのようにまとめて、楽園を完璧に演出する装置を作り出しているのだろうか。インタビューの中からわかったことは3つである。第一は、

期限なしの雇用の重視である。Xウブド・ホテルのように、X-Xホテルも期限のつかない雇用の重視している。インタビューの当時、期限なしのスタッフは166人、契約雇用が11人、臨時雇いが10人から12人であった。第二は、部局をこえたインナーコミュニケーションの意識化である。第三は、「伝統的な制度」の活用である。ウブドと同様に、X-Xホテルも高カーストのスタッフを起用することによって、ホテルの従業員間ならびに周辺共同体との関係を効果的にしている。X-Xホテルは、現地的な資源と呼ばれるものを利用しながらも、基本的にはグローバルレベルの人材育成を行うことで、楽園を演出する装置を作りあげているのである。

(2) 周辺共同体との関係

X-Xホテルの周辺には5つの村がある。そこでX-Xホテルは、それらの周辺共同体とさまざまな協力関係をとりむすんでいる。X-Xホテルにおいて共同体との関係を長年担当してきたのは、ジョグジャカルタ出身の人材部門のマネージャーA・P氏であった。A・P氏の職歴は、ロンボク島のホリデイ・インからスタートし、ジョグジャカルタのシェラトンホテル、スラバヤのウェスティンホテルを経て、X-Xホテルにいたっている。ウェスティンで働いていたときは、サウジアラビアや台湾でのグループホテルの開業に人材育成のマネージャーとして派遣されたという。A・P氏は、「Xグループのホテルとシェラトンやウェスティンなどのホテルには大きな違いがある。とりわけ違うのは周辺の共同体との関係だ」と語った。

A・P氏によるとX-Xホテルを取り囲んでいる村落は、観光資源であるとともにトラブルの元でもあった。たとえば、かつて村人がホテルにさまざまな要求をするために訪れたことがあった。また、ホテルに至る道を村人たちがバリケードで塞いでしまったこともあった。そこでホテルは数年前から、サトリア・カースト出身のA・P氏をコミュニティ関係のマネージャーに任命した¹⁵。すると、そうしたトラブルは起きなくなったとのことである。インドネシアのこの地方において人々は基本的にはイスラム教徒であるが、そうであってもバリと同様にカースト制度が日常生活において影響力をもっている。もちろん、この地方においてもカーストが昔と同じまま残っているわけではなく、近代のなかで再構成され、かつグローバルな産業のなかで改変されて強化されている。X-XホテルのA・P氏の例をみても、伝統的と呼ばれるような制度がグローバルな産業の中で利用されていることがわかる¹⁶。

ジェネラル・マネージャーの話によれば、ホテル自体が伝統的な儀式を執り行うこともあるという。例えば、ホテルは定期的にシャーマンを招き、ホテル内を清める儀式を行っている。これによってホテルは、現地出身の従業員と周辺の共同体に対して、霊的な意味でも汚れていない場所であることを示すことができるのである。

ウブドと同様に、X-Xホテルも近隣の村落にたいしてパトロンのような位置を築いているようである。ジェネラル・マネージャーは、「共同体との関係の築き方は、多くの点でXウブド・ホテルを参考にした」と語った。各部局のマネージャーたちは村落の会合、結婚式などに

出席し、モスクの建造や改築のときには寄付を行っている。また、医療と衛生にかんする基金なども創設したという。

これらの寄付は共同体とのよい関係を築くだけでなく、周辺の共同体を観光の資源としてホテルの舞台へと組み込むための投資にもなっているようだ。ホテルの滞在客はこれらの近隣の村をホテルのドライバーの案内で訪問し、祭りや伝統儀式のときだけでなく、日常の生活を見物することもできる。観光資源としての村落風景としては、ホテルの前に広がる棚田がある。滞在客はウブドのように、この棚田とそこで働く農民たちをまるで絵画を見ているように楽しむことができる。12ヘクタールの広大な棚田は、X-Xの所有物で近隣農民に貸与されている。もとは荒地でありホテルの開業のときにホテルによって開墾された。以上のようにX-Xをとりかこむ村々もウブドと同様に、さまざまな寄付に支えられ、観光客のまなざしのもとでよりいっそうオーセンティックな村落に改変されているといえるだろう。

もちろん、ホテルは近隣の5つの村から多くのスタッフを雇い入れている。例えばわたしたちがインタビューを行ったドライバーのD氏は近隣の村の出身で、兄弟たちもこのホテルで働いているとのことであった。またウブドのように、X-Xホテルに直接雇用されていない村の人たちも、ホテルの演出装置に効果的に組み込まれていた。

たとえば、ウブドと同様にここにおいても近隣の村の子供たちに伝統舞踊が教えられている。X-Xでは近隣の村の少女たちが、伝統的な衣装を着けジャスミンのフラワーシャワーで滞在客を迎えてくれる。この少女たちは、ホテルが提供しているこの地方固有の舞踊の教室に参加しているようだ。少女たちは舞踊の授業を無料で受けることができ、ディナーショーで踊りを披露するほど上達すれば出演料をえることができる。これらの少女たちを教えているのがY氏である。Y氏は、X-Xホテルでおおよそ80名の生徒を教えている。この80名のうちおおよそ70名が女性で、10名が男性である。リゾート内の踊りのレッスンは毎日3時から4時半で、一人の生徒がだいたい週に2回から4回のレッスンを受けにきている。生徒たちの年齢はまちまちで、7歳ぐらいから一番年長で19歳である。小学校の生徒たちは平日にレッスンを受け、高校へ通学している生徒たちは週末にレッスンを受けている。彼女が教えているのは、この地方の宮廷 (*keraton*) に伝わる古典的な舞踊と現代の舞踊だ。Y氏は、「X-Xホテルがわたしと子供たちに、伝統的な舞踊を学びかつ上演するためのすばらしい機会を与えてくれている」と語った。Y氏によれば、政府が伝統的な舞踊をほとんど支援してくれない現状では、ホテルが伝統舞踊のパトロンである¹⁷。

以上のように、ホテルは周辺の共同体と「伝統的」と呼ばれるような制度を利用しながら協力関係を作り、パトロンとしてふるまっている。さらにこの関係性を利用して、ホテルの表舞台を効果的に作るためのさまざまな資源を創造している。ウブドのように、インドネシアのこの地方に固有な村落の風景とそこに居住する人々が作りだされているのである。

V. まとめ

本論文は劇場ホテルという概念を使いながら、インドネシアにおけるグローバルリゾートホテルが作り出している、楽園を演出し文化を作り出す新しい装置について検討した。X ウブドやX-X ホテルでは、バリやインドネシアのそのほかの地域に固有だと考えられている農村風景と伝統的な家並みが再現されて表舞台を形成し、従業員や周辺の村落の住民たちが完璧な脇役や舞台装置係をつとめ、滞在客は楽園のドラマの主人公を演じる。劇場ホテルにおいて演技という行為を遂行することで、滞在客はたんなる外からの観察者ではなく、内部で体験する行為者になる。とはいえ、それは現地の人々と同一化することではなく、村落に身をおきながら村落の人々を眺める、植民地時代の支配者と重なるようなまなざしを獲得することである。劇場ホテルにおいて演技をしているのは滞在客だけではない。脇役として観光の演劇に参加している従業員や村落の住民たちも、観光客の視線のもとで演技をすることをとおして新しいアイデンティティを獲得しているのである。劇場ホテルの装置は「家族」や「伝統」などの用語をとおして、観光との関係で人々のアイデンティティを作り上げていく。人々がますます伝統的な価値観を守り家族を大事にし伝統的な生活を行おうとすることが、グローバルな産業で通用する規範的な従業員と、伝統的な村落の風景をみずからすすんで産み出す村人を作り出すのである。

今回の調査では、日数において限りがあったことに加え、インタビュー対象者にかんしてもホテルの関係者が中心であったため、より多角的に新しい観光の装置を記述するという点において不十分であったことは否定できない。そのために、グローバルな観光資本による支配の確立という面が強調され、これに対する対抗や交渉の側面に光を当てることができなかった。これらの点にかんしては今後の課題としたい。

註

- 1 インドネシアにおける観光については、さまざまな分野において研究や報告がなされている。インドネシアの観光政策については白坂(2004)がある。インドネシアの観光産業については高木(2002)が報告しており、インドネシアをふくむ日本人観光客の動向については福永(2001)の研究がある。バリの観光ホテルを建築的視点から論じたものとしては中尾(2005)がある。
- 2 「観光によって作り出される文化」はホストとゲストの双方をふくんでいる。たとえば、橋本和也は観光文化について「観光の現場で人々が出会う文化」であり、「地元の人々が文化的な文脈を異にする観光客をいかに迎えるか考案した方法や、観光者が自らの「観光」を満足させるために観光地に要求するさまざまな内容も含まれる」と指摘している(橋本1998:4)。
- 3 これは、メアリー・ルイーゼ・プラットの接触領域についての議論を観光という場面に当ては

めたものであるともいえる (Pratt 1992)。プラットの接触領域では、接触到先立って二つの文化があるのではなく、接触という行為によって事後的に二つの文化が分節化されることが指摘されている。そのような接触がおこり、文化が形成される場が接触領域である。プラットの理論を観光にあてはめると、観光客と現地民という二つのアイデンティティがあらかじめ存在しているのではなく、観光による接触をとおしてはじめて、二つのアイデンティティが形成されるのである。

- 4 ヴィッカーズは、二つのイメージが接触によって作られたものというより所与のものとして考えているようである。その意味では、本質主義的立場をとるものと考えられる。
- 5 観光産業の発展過程における「伝統の創造」はバリに限られたことではない。山中速人は『ハワイ』(1993年)において、ハワイがアメリカ人の手によってアメリカ人の望む姿に作り出されたことを指摘している。18世紀にヨーロッパを風靡した太平洋の楽園幻想が、20世紀における交通網と観光産業の発達、さらには政府の観光産業へのバックアップに支えられて、ハワイの姿を改変していくことになった。有名なハワイアン音楽も先住民本来のものではなく、観光産業発展の過程においてアメリカ本土の音楽産業のなかで産み出された(山中 1993: 107)。
- 6 ここで念頭においているのはミシェル・フーコーの『監獄の誕生——監視と処罰——』における規律化の概念である(フーコー 1977)。
- 7 中尾によれば、バリ・アガとは、ヒンズー教伝来以前のバリ固有の宗教意識を持つ人々のことである(中尾 2005: 241)。
- 8 このまなざしは、エドワード・サイードが『オリエンタリズム』で述べたような、失われたオリエントを回復しようとするまなざしと重なるだろう(Said 1979)。
- 9 たとえば『海外労働時報』2001年4月号は、2001年バリ全域において観光業界で働く1万人の労働者が、抗議デモを行ったと記している。
- 10 G・S氏によれば、一年半前にヌサ・ドゥアにあるXグループのホテルでボーナスをめぐって4時間のストライキが行われたことがある。
- 11 時間や場所に制限があったため、組合や雇用の問題すべてにかんしてインタビューすることができたわけではない。
- 12 ここではフーコーのこのような規律化が、学校や病院をとおして「理性」と「非理性」との対立を参照するのではなく、「家族」や「伝統」といった参照項を内面化することでホテル装置をとおしてなされるのではないか。フーコーのいう規律化については、たとえばフーコー(1977)を参照のこと。
- 13 この点にかんしては、今後よりつつこんだ調査をする必要がある。近隣の村落の住民たちはホテルとの関係が密接であるため、少なくとも表面的にはホテルに対して批判的な態度をとるといふことはしない。ジェームズ・スコットが『弱者の武器』(1985)において描いたセダカ村の農民のように、表立っては抗議をしないかわりに、裏で陰口をいったり仕事をさぼったりと

- このような「日常的な抵抗の形態」がみられるかもしれない。
- 14 私たちがバリを訪れたのは、ジンバランとクタにおける2005年の爆弾テロのあとであったため、観光客の数は減少しており、セキュリティ・チェックが強化されていた。
- 15 サトリアというのは戦士のカーストを意味するインドネシア語で、インドにおけるクシャトリアに相当する。
- 16 なおA・P氏によれば、コミュニティ関係マネージャーは2005年以来近隣の村出身のスタッフが行っている。
- 17 とはいえ、ホテルが提供する舞踊のレッスンをめぐって問題がまったくないわけではない。Y氏が語るところでは、リゾートで舞踊を習っている子供たちを嫉妬する子供たちやその親たちがいるという。それらの親たちのなかには、踊りより学校の勉強の方が大切だというような陰口をたたくこともあるという。

参考文献

- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York and London: Routledge, 1994. [ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱——』竹村和子訳、青土社、1999.]
- フーコー、ミシェル『監獄の誕生——監視と処罰——』田村俣訳、新潮社、1977.
- Clifford, James. *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge and London: Harvard University Press, 1998.
- 福永昭「世界観光における日本人海外旅行者市場の重要性とそのインパクトに関する研究——アジア金融経済危機前後の香港およびインドネシアにおける国際観光変動——」『亜細亜大学 経営論集』36巻2号、2001.
- Geerts, Clifford. *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*. New Jersey: Princeton University Press, 1980. [クリフォード・ギアツ『ヌガラ——19世紀バリの劇場国家——』小泉潤二訳、みすず書房、1990]
- Greenwood, Davydd J. “Culture by the Pound: An Anthropological Perspective on Tourism as Cultural Commoditization”, In Smith, Valenne L. ed. *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. Second Edition. Philadelphia: The University of Pennsylvania Press, 1977 (1989).
- 橋本和也『観光人類学の戦略——文化の売り方・売られ方——』世界思想社、1999.
- Hobsbawm, Eric. “Introduction” in Eric Hobsbawm and Terence Ranger ed., *The Invention of Tradition*. The Press of the University of Cambridge, 1983.
- JTB『アジア・リゾート』JTB 出版社、2006.
- MacCannell, Dean. “Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Setting” *American Journal of Sociology* 79, 1973.

MacCannell, Dean. *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, New York: Schocken Books, 1976.

中尾憲明「バリのホテル」『アジア遊学』80号, 2005.

永渕康之『バリ島』講談社, 1998.

大谷聡, 中岡義介「バリ島工芸村ウッドゥにみる住生活近代化の動向について」『都市計画論文集』38巻3号, 10月, 2003.

Pratt, Mary Loise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. New York and London: Routledge, 1992.

Said, Edward W. *Orientalism*. New York. Vintage Books, 1979.

Scott, James C. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven and London: Yale University Press, 1985.

白坂直子「スハルト政権期の観光開発——五カ年開発計画の分析を中心に——」『史苑』64巻2号, 2004年3月.

高木雅一「インドネシアの観光産業」『ダイワ・アジア&ワールド』89号, 2002.

玉置泰明「「持続可能な」観光開発——リゾートの光と影——」山下編『観光人類学』1996所収.

アーリ, ジョン『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行——』加太宏邦訳, 法政大学出版局, 1995.

Vickers, Adrian. *Bali: A Paradise Created*. Australia: Penguin Books, 1989.

山下晋司『バリ 観光の人類学』東京大学出版会, 1999.

山下晋司編『観光人類学』新曜社, 1996.

山中速人『ハワイ』岩波書店, 1993.

図1 聞き取り相手リスト

X-X ホテル (2006年2月12日~13日)

名前	性	職業	その他	言語
D	M	ドライバー	ホテル隣村出身	I
S・F	M	ジェラル・マネージャー	シドニー出身, シェフ兼務	E
A・P	M	人事マネージャー	サトリア・カースト	E
Y	F	舞踊教師	1997年よりホテルで指導	I
S	M	舞踊教師		I
KYA	M	ドライバー	N村出身	I
M	M	フード部門	P村出身	I
P.O.	M	ベル・キャプテン	空港関係の担当	I/E

X ウブド・ホテル (2006年2月14日~15日)

名前	性	職業	その他	言語
K・R	M	ドライバー	勤続16年	I
D・T	F	フロント・オフィス・マネージャー	バリ観光アカデミー (Akademi Pariwisata Bali) 卒業	E
S・H	M	フード部門 バトラー	バリ観光アカデミー卒業 スリランカでトレーナー	I/E
W・W	M	ガーデナー	勤続8年	I
K・S	M	ガーデナー	勤続8年	I
W・N	F	村人	鉈をリゾート内で洗っていた	I
G・S	M	物品購買部門	Xウブド労働組合代表	I
W	M	人事	バリ観光アカデミー卒業	E
A	M	コミュニティ・オフィサー	K村住民	I
S	F	村人	夫(R)がホテル従業員	I
Ibu R	F	村人	Rの母	I
B	M	K村の伝統的な警察	K村住民	I
C	M	ベル・キャプテン		I

X ヌサ・ドゥア・ホテル (2006年2月15日)

名前	性	職業	その他	言語
M・B	M	地域マネージャー ジェネラル・マネージャー	ハワイ出身	E
H	M	フロント・オフィス	日本語ができる	I

Y ホテル (ヌサ・ドゥア地域, 2006年2月15日～16日)

名前	性	職業	その他	言語
R	M	プール担当		I
A・R	M	レストラン部門 スーパーバイザー	39歳, Anak agung という 高カースト出身	I
W・S.	M	レストラン	勤続22年	I
J	M	ドライバー	アウトソーシング 5日間仕事がなかった	I

Z ホテル (ウブド地域, 2006年2月14日)

性別の **F** は女性, **M** は男性をさす。「言語」は聞き取りのときに使用した言語である。**E** は英語, **I** はインドネシア語を意味している。

The Formation of Tourist Culture in the Theatre Hotel

Yufu Iguchi *, Mari Kondo **

Abstract

This paper explores relations between the development of the global tourist industry and the formation of culture in developing countries by investigating strategies and practices of 5 resort hotels in Indonesia. It suggests that the cultural apparatus of a “theatre hotel” emerges in tourist sectors of developing countries and that this apparatus generates new culture through contacts between guests and hosts. The paper explores the formation of culture both on the stage and the backstage of these theatre hotels. It is based on research at five resort hotels in Indonesia over a one-week period in February 2006, during which intensive interviews were conducted, including those with the regional director, general managers, officers, workers, labor union officers, family members of workers, and villagers during the visit. In the theatre hotel a guest obtains his or her new identity through performing as a main protagonist of a drama in paradise according to a life-style plot provided by the hotel. On the other hand, the theatre hotel functions as an apparatus where managers, employees and villagers become “disciplined clues,” following Foucault and Geertz, in the sense that they subjectively produce a tourist paradise. The theatre hotel rearranges “traditional” concepts such as “family” and “caste” in a modern manner and employs them to operate as an apparatus of tourist paradise.

Keywords

Culture, Identity, Tourism, Indonesia, Bali, Tradition

* Correspondence to : Yufu Iguchi
Associate Professor, College of Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University
1-1 Jumonjibaru, Beppu, Oita 874-8577 Japan
E-mail : yufuig@apu.ac.jp

** Correspondence to : Mari Kondo
Professor, Doshisha Business School
Karasuma Higashi-iru Imadegawa, Kamigyo-ku, Kyoto, 602-8580 Japan